

(令七国グ後)

小論文

- ・問題は1～8ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二〇〇点

次の文章を読んで、あとの問一〜三に答えなさい。

技術決定論と社会的構成論は、技術と社会を別個の領域として捉えたうえで両者のどちらかに私たちが生きる世界の状態を生みだす最終的な根拠を置く、という点では同型である(いずれに根拠を置くかの違いにすぎない)。両者の対立は、技術／社会という二項対立のどちらの領域がもうひとつの領域の上位に立ち、それを規定するのかをめぐって生じる。これに対して、そもそも科学技術と社会という二項対立を前提とすること自体を批判したのが、一九八〇年代から提唱されてきたアクターネットワーク論(ANT: Actor Network Theory)である。

アクターネットワーク論の主な推進者の一人である哲学者・人類学者ブルノ・ラトゥールは、技術をめぐる従来の議論を、人間と非人間(nonhuman)の関係を一方による他方の支配という図式に還元するものとして批判する。

図式的に整理すれば、科学技術を中立的な道具とみなす社会的構成論では、技術的人工物がいかに作られ使用されるかは人間の欲求や意図によって規定され则认为。これに対して、科学技術をそれ自体の推進力をもった自律的な営為とみなす技術決定論では、技術的装置がいかに作られ配置されるかによって人間の行為や意図自体が規定され则认为。前者の発想では、技術は人間が自らの目標を実現するための単なる仲介項(intermediary)となり、社会関係に対して副次／従属的なものとなる。後者の発想では、人間は技術が特定の目標を実現するための単なる仲介項となり、科学技術が外部から社会を変化させる。いずれにおいても、さまざまな現象が人間の側か非人間の側に還元して理解される。人間と技術の接続を通じて生じる状況を両者のどちらかを主語として捉えることは、私たちの日常においても頻発する語り口であろう。たとえば、「私たちはICTでビジネスの未来を切りひらきます」といった企業広告や「ゲームが子供を中毒にする」といった警告に見られるように。だが、ラトゥールによれば、技術によって生じるのは、むしろ人間と非人間がたがいの性質を交換しあいながら共に変化するという事態であり、両者はたがいの媒

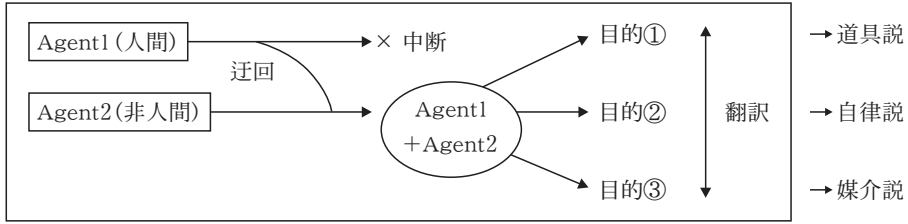


図1 異なるエージェントが結びついた第三のエージェントの行為が向かう先が、人間的エージェント(市民)に固有の目的(①)によってあらかじめ規定されていると考えると道具説が、非人間的エージェント(銃)にあらかじめ規定されていると考えると自律説が、あらかじめ規定されない未知の目的を生みだすと考えたと媒介説が導かれる。

介(Mediation)となることで新たな行為のかたちを生みだしていく。そこにおいて、人間以外の存在者もまた、固有の形態や性質をもった行為者(エージェント)「アクター」「アクタント」等と呼ばれる)として、人間を含む他の行為者と関係しながら特定の現実を構成している。

ラトウールの挙げる次のような例を考えてみよう(図1)。市民(人間)と銃(非人間)という二つのエージェントが結びつくとき、両者が合成されて新たなエージェント「市民+銃」が現れる。この第三のエージェントの働きが、第一のエージェント(人間)に内在する意図(目的①)に完全に従うと考えると、「善良な市民は銃をもつていても発砲などしない」という道具説的な説明になる。一方、銃という第二のエージェントに内在する「人を殺す」という機能(目的②)に完全に従うと考えると、「善良な市民でも銃をもてば殺人を犯しかねない」という自律説的な説明になる。

しかし、より一般的には第三の可能性が実現される。^(ア)二つのエージェントがたがいたがいの媒介として働くとき、それぞれが元々もっていた目的が「翻訳(translate)」される。たとえば、相手を殺すつもり(目的①)で銃(エージェント2)、その殺傷能力目的②を手にした人(エージェント1)であっても、手にした銃の重さに我にかえて、殺人をやるかもしれないし、銃を脅迫に使って相手を屈服させようとするかもしれないし、銃で人を撃とうと考えた自分に嫌気がさして自殺してしまうかもしれない。こうして、あらかじめ存在する目的①、②とは異なる新しい目的③(殺人の中止/脅迫/自殺など)が生みだされる。ラトウールのいう「翻訳」は、言語の翻訳になぞらえて行為者同士の相互作用を捉えるものであるが、その相互作用は、原語と訳語が一对一で対応しているという言語翻訳

の一般的なイメージとは著しく異なる。言うなればそれは、翻訳を通じて原語と訳語の意味が共に変化していくような過程である。異なる行為者がたがいに結びつくことによって、それぞれの行為の向かう先があらかじめ確定できない仕方に変化する。その過程をラトウールは「翻訳」と呼んでいるのだ。

こうしたラトウールの発想は、一見すると道具説(社会的構成論)と自律説(技術決定論)の折衷案のように思われるだろう。だが、そこには前二者とは決定的に異なる要素が含まれている。道具説や自律説では、行為を規定する最終的な根拠があらかじめ技術と人間のどちらかに与えられている。だが、アクターネットワーク論(ANT)において行為を規定するのは技術と人間が結びついて生みだされる第三のエージェント、人間と非人間のハイブリッドである。したがって、ANTの発想を正面から受けとめれば、そもそも人間は技術を制御できないし、制御などしていないことになる。もちろん、技術的人工物と結びついたハイブリッドとしての「人間+銃+銃人間」は、銃を制御している。だが、そもそも、どのような仕方で人間が「銃人間」となるのかを、人間は完全には制御できない。それを規定するのは人間であると同時に銃であり、より正確には、両者が織りなす相互作用である。

この例は、いささか形式的で抽象的であるように思われるかもしれない。私たちにとってより身近な事例を挙げよう。

日本国内で七三〇万人を超えるユーザーに利用されているメッセージアプリ「LINE」では、相手のメッセージを読んだことを伝える既読マークがついていながら返信しない行為が「既読スルー」と呼ばれ、一〇〜二〇代の若者同士のコミュニケーションにおいて大きな問題となっている。それは円滑なコミュニケーションを阻害する行為として忌避されるために、「既読スルー」と感じられないようにメッセージのやりとりをいかに続け、終わらせるかに常に気を使わなければならない。

しかしながら、「既読スルー」は、LINEというアプリに技術的に実装されている機能ではないし、ユーザーがLINEを使う以前からそのような行為のあり方を望んでいたわけでもない。LINEは、二〇一一年の東日本大震災の三ヵ月後にサービスを開始している。アプリ開発中に生じた震災でスタッフの安否確認をしている際に、メッセージへの返信はなくても読んだことさえわかればいいのではないか、という発想から既読通知機能が作られたという。

スカイプのチャット機能やインスタントメッセージングなど、先行する類似のサービスにおいては、一つの枠組みに会話者の

一方のメッセージが現れ、それが交互に連なっていくデザインとなっている。これに対してLINEのチャット画面は、ユーザーの発言がふきだしに包まれたものが一つの画面の左右に連なっていく、スタンプマークや写真はふきだしの外に表示される。その画面デザインは、一つの対話空間をユーザーがともに作りあげていくことを強調するものであり、こうしたデザインが、フィーチャーフォン（ガラケー）とは異なり常時ネットに接続して情報を更新するスマートフォンと結びつくことで、流れるようにメッセージがやりとりされるタイムラインが可能になっている。こうした技術的特徴と、会話の内容以上に会話が同期しながら続いていく「フリ」を重視するコミュニケーションスタイルが結びつくことで、空間的にも時間的にもバラバラに行動している人間同士が対面的な会話のようにやりとりする「疑似同期型」のコミュニケーションが生みだされている。そこにおいて、既読マークが出ているのに返信しない、同期的な対話の進展を阻害する行為が「既読スルー」として対象化され、忌避されるようになったと考えられる。

既読スルーという行為は、LINEの技術的特徴によっても、それを使うユーザーの社会的性質によっても完全には説明できない。LINEユーザーの中には、既読マークが出ればメッセージが伝わったと考えてそれ以上の発言をやめるものもあるだろう。会話のノリを重視する人々であっても目の前の人に話しかけられて返事をしないのは端的に「無視する」ことであり、LINEとの結びつきがなければ「既読スルー」にはならない。既読スルーは、LINEと人々が結びつくことで生みだされた「LINE人間」という第三のエージェントにおいて、はじめて実行可能な行為となったのである。

私たちは自律的なテクノロジーに操られているわけではない。だが、自律的な私たちがテクノロジーを操っているわけでもない。私たちはテクノロジーを制御などしていない。むしろ、私たちはテクノロジーへと生成している。ただし、ここである「生成（becoming）」とは、そのものと同一になることを意味するわけではない。市民が銃になるわけでもないし、若者がLINEになるわけでもない。市民は「市民＋銃」になり、若者は「若者＋LINE」になる。「テクノロジーへの生成」とは、私たちは技術と結びつくことで以前とは異なる存在へと変化するものであり、その変化をあらかじめ完全に理解することも制御することもできないし、現にしていない、ということである。

テクノロジーをめぐる道具説と自律説の対立を支えているのは、「社会と自然」、「人間と非人間」、「主体と客体」を明確に区別し、両者を一方による他方の制御という非対称的なしかたで関係づける近代社会の根幹をなす発想である。前者が後者を制御するとき、自然を解明し改変する科学技術は人間社会が目的を達成するための道具となり、後者が前者を制御するとき、科学技術は人間社会から自律して社会に一方的な影響を与えるものとなる。だが、ラトウールによれば、これらの二項対立は諸領域を切り離しそれぞれに「純化」する近代的発想の産物に他ならない。人間から非人間を切り離すことでテクノロジーはそれ自体に固有の機能や利便性をもつものとされ、非人間から人間を切り離すことでテクノロジーを用いる人間はそれ自体に固有の意志をもつことになる。だが、表向きの純化を維持すると同時に、近代社会は両者を暗黙裡に混ぜあわせることで、たがいがたがいを「翻訳」しながら人間にも非人間にも還元できない新たな行為を生みだす運動を促進してもいる。ちょうど、人々がLINEと結びつくことで「既読スルー」という新たな行為が生まれたように。

特定の最新技術が広く用いられるようになるのは、それが「便利」だからではない。むしろ、多くの人々がその技術と結びつきながら自らのあり方を変容させていくことで、それは便利な道具である。彼／彼女らをスマホへと誘うためには、絶えずアップデートされるアプリやOSを活用し、対面的会話の最中にもスマホをいじってオンラインの対話に参加し、SNSに日常の断片を投稿してシェアするといった、「スマホ人間」としての生きかたを魅力的に示さなければならない。新たな技術が人々を魅了していくプロセスは、その技術と人間が結びついた第三のエージェントへと人々が変化していくプロセスなのである。

このように考えることが妥当なのであれば、現在のAIブームを、知能機械へと生成する試みとして捉えることが可能になる。私たちは、AIと結びつくことで以前とは異なる存在へと変化していく道筋に——その変化をあらかじめ完全に理解も制御もできないにもかかわらず——入りこんでいる、ということだ。なぜそう言えるのか、疑問に思われるかもしれない。科学技術は人類の理性的な営みの産物であり、そのような無計画な試みであるはずがない。そう感じる人も少なくないだろう。

だが、そうした感覚は、テクノロジーと人間が結びついて生まれるハイブリッドを事後的に人間側の意図や必要性に還元する

「純化」に基づいている。私たちは技術を制御できないし、現にしていない。人間の非人間への生成を無視する近代的発想を放棄してしまえば、テクノロジを、劇的に社会を変える革新的な力として捉える（自律説）と同時に、あくまで人間によって利用され制御されるものとして捉える（道具説）という矛盾に満ちた二枚舌はもはや成り立たなくなる。

近い将来、一説によれば二〇四五年頃に、あらゆる知的能力において人間を超えるコンピュータが登場することを予測する「シンギュラリティ」仮説は、二つの暗黙の条件によって成り立っている。第一に、コンピュータの計算力が絶えず向上することであり、第二に、人間の知的な能力がコンピュータの計算力と比較できる、つまり類比的なものとして把握されることである。したがって、「シンギュラリティ」仮説を一笑に付すことができない現状は、私たちが機械との関係において、この二つの条件が真となるような世界のあり方を肯定し現実化しようとする存在へと変容しつつあることを示している。

コンピュータの計算力とは、1と0の組み合わせによって構成されるデジタルな数列、文脈に依存しないデータを処理する能力である。コンピュータにおける計算力の向上は、私たちの脱文脈的な活動を支援し、拡張し、活性化させる。出自や地縁や血縁といった個人を抑圧する制約を弱め、より自由により多様に個々人の意志や能力を展開させることが肯定される現代世界の規範的発想を内面化している限り、私たちが、コンピュータの計算力を絶えず向上させていく試みを止めるための倫理的な根拠を提示することは極めて困難だろう。

同時に、そのような自由な個人のふるまいを担保しつつそれでも一定の秩序を生みだすために、私たちは、他者が理解できる客観的なフォーマットを通じて自らの行為や人格や責任を明らかにすることをたがいに要求するようになっていく。個人の内面は、もはや文学や日記や精神分析によって私的に探求されるものではなく、SNSを通じて常に開示され編集され、共有（「シェア」）されるものへと変化する。逸脱的な個人への社会的排除もまた、しばしば既存の道徳規範や法律に基づいてなされるよりも前に、「炎上」と呼ばれる情報と情動の大規模なシェアを通じた排除の構成によって遂行される。SNSに投稿される喜怒哀楽を伴う人々の日常の一コマは、コンピュータが処理しうるデジタルな数列へと変換される形式に沿う限りにおいて他者へと伝わる。同時に、より多彩で自由な自己の表現をデジタルな数列によって補足しうる技術が次々と開発されていく。誰にでも理解できる客

観的な情報へとさまざまな人間的営為を変換していく私たちの「自己」のつくり方自体が、それをコンピュータによる非文脈依存的な記号操作と類比的なものにしているのである。YouTube上のデータをもとにグーグルのアルゴリズムが「猫」の顔を認識できるようになったと言われる。だが、それは多くの人々が猫の動画をYouTubeにアップロードし、「猫」の一般的なイメージがいまや街角の野良猫よりもオンラインの画像や動画によって形成されているからこそ説得力を帯びている。

もちろん、私たちが今後も、このような仕方では知能機械へと生成し続けていくとは限らない。人間とコンピュータの知的な類比性がまったく認められないようになるかもしれないし、従来とは異なる仕方では類比性が見いだされていくかもしれない。

シンギュラリティ仮説が説得力をもち得た二〇一〇年代後半の状況を、後世の人々は驚きをもつて振り返るようになるかもしれないし、むしろ遅すぎる判断だったとみなすかもしれない。未来を予測することは本論の目的ではない。だが、テクノロジへの生成という観点から言えば、そのような未来へと繋^{つな}がっているのは、より高度な知能機械と結びつくことで自らを変容させつつある私たちの現在の営みに他ならない。

AIをめぐる以上の検討からみえてくるのは、完全には制御できない人間以外の存在との関係を通じて自らを変化させつつある私たちの姿だ。合理的に世界を観察し制御する手段として科学・技術を捉える常識的な見地からすれば受け入れがたいイメージかもしれない。だがそれは人間のあり方としてそこまで突飛なものだろうか？ 実際、人々の営みが完全には制御できない人間存在以外の存在との関係によって規定されるという状況は、世界中のさまざまな地域に暮らす人々の営みを調査してきた社会／文化人類学の観点から見れば特に珍しいものではない。

出典 久保明教『機械カニバリズム』（講談社、二〇一八年）より。ただし、一部改変した。

問一 傍線部(ア)について、「翻訳」とは、どのようなことを意味しているか。本文の内容に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。(配点三〇点)

問二 傍線部(イ)で論じられている「二項対立」は、どうして「純化」の産物であるのか。本文の議論をふまえて、三〇〇字以内で説明しなさい。(配点五〇点)

問三 傍線部(ウ)で述べられている「自らを変容させつつある私たちの現在の営み」について、本文で言及されているもの以外の事例を挙げ、それがどのような未来に繋がるか、また、その未来と関わるために、あなたは大学で人間について何を学ぶべきだと考えるか、一〇〇〇字以内で論じなさい。(配点一二〇点)